

中部大学 工法庵・洞雲亭庭園 改修 2018、2019 年

Kuho-an, Doun-tei: Garden of tea house and Traditional temple house, Chubu University, Kasugai City, Aichi Pref.

岡田 憲久 OKADA Norihisa



写真1 石橋のかかる沢の景

丘陵地に広がる中部大学キャンパスのアベマキを中心とした自然林の残る一角に庭園は位置する。1990年、滝、流れ、池の修景がなされていたわずかの平坦地に待庵写しの二畳茶室「工法庵」が研究目的で建てられ、その茶室と水屋でつながる形で、翌年に書院「洞雲亭」が完成した。書院建物は香川県小豆島の洞雲山観音寺の庫裏だったもので、建て替えに際し中部大学に寄贈された。その際に1812年（文化9年）の棟札が発見されている。

工法庵と洞雲亭の庭園を計画するにあたり、「庭園とは人間と自然の関係のデザインである」との認識の元、一旦落ち着いていた自然の環境にどのように立ち入るかに留意し、既存の流れを池に注ぐ手前で堰き止め大きな溜まりを作った。こうして露地門から庭園に入るとまず石段で谷を下り、沢を橋で渡って再び谷を登って玄関へ至る、というドラマ性のある動線が生まれた。また建物に池が引き寄せられ、室内から水面の景色が楽しめるようになった。植栽は四季の変化を際立たせるよう、モミジの若木を流れの周囲に配し小さな谷を特徴づけた。露地門を潜ったこの一角は校舎棟群の中にありながら「市中の山居」として全くの別世界となった。

大学の教育の場および迎賓施設として利用され続け30年弱の年月が経った2018年、改修が叶うこととなった。樹木の剪定、除去を行い空間に広がりを取り戻し、階段の段数を増やして緩やかにした。橋は腐朽の進んだ木橋を古材の石橋に据え替え、狭い軒内しか歩けなかった一部の不自然な動線に飛び石を補足して歩きやすくした。朽ちた木製の井戸枠は撤去し石畳の道を伸ばした。そして最も力を入れたのが、待合付近やにじり口に至るまでの露地を自然石の飛び石を打ち直して整えることであった。加えて灯籠も機械加工のものから、時代を経た小さな春日灯籠に置き換え、落ち着いた景色とした。今後、適切な管理の手を入れながら再び30年、親しまれ続けることを祈ってやまない。



写真2 沢と書院の景



写真3 キャンパス内に現れる露地門



写真4 書院玄関前から谷を見下ろす



写真5 書院玄関周り



写真6 谷を渡って書院へ上る階段



写真7 書院玄関から庭を臨む



写真8 待合付近の景



写真9 待合からにじり口への飛び石



写真10 工法庵にじり口付近の景。灯籠は奈良石



写真 11 待合へ振り返った景。飛び石は庄内川系の玉野石を用いた



写真 12 書院脇の園路には屋根に使われていた瓦を使用



写真 13 書院裏のつくばいと土留めの石垣



写真 14 滝の水を竹樋で水鉢に落とす

#### 施工の様子



写真 15 待合飛び石の配石



写真 16 階段の改修



写真 17 灯籠の設置



写真 18 木橋から石橋へ改修

#### 作品データ

所在地／ 愛知県春日井市

発注者／ 中部大学

設計／ 岡田憲久（名古屋造形大学）、田井洋子（景観設計室タブラ・ラサ）

施工／ 株式会社庭守園、石工事田村組

規模・竣工／ 約 1,500 m<sup>2</sup>・初期竣工 1991 年、改修工事竣工 2019 年

※写真撮影： 景観設計室タブラ・ラサ

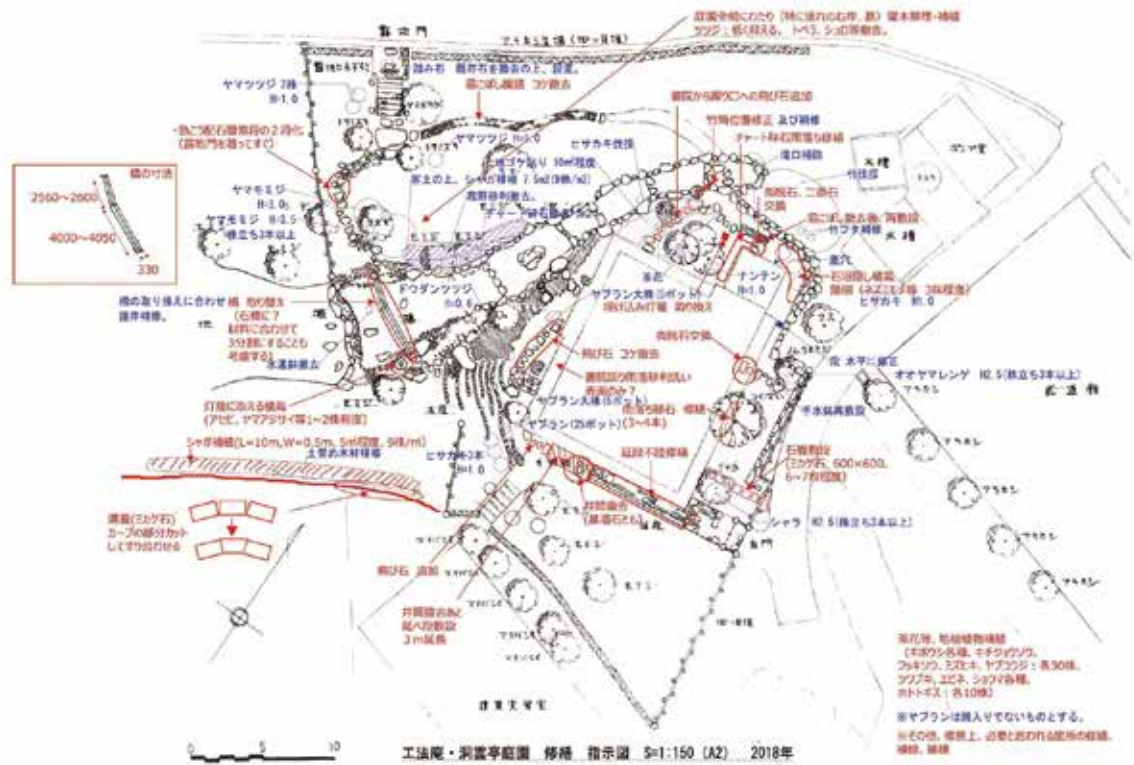


図1 改修にあたっての指示図



写真19 「学校法人中部大学 創立80周年記念 中部大学 UNIVERSITY GARDEN と岡田憲久」展(2019年10月15日～2020年1月14日、中部大学民俗資料博物館)の会場風景。学校法人中部大学創立80周年を記念した博物館の秋季企画展として、中部大学キャンパスにある筆者設計の3つの庭園の造園から2018年の改修状況までが、図面や写真などの関連資料を用いて紹介された。